

軽音楽クラブ部史(2)

ハワイアン小史

藤井英一 (S37年卒/BH)

会誌「楽友」(第二号)に、「軽音楽クラブ部史」を田村さんが発表され、「続きは藤井英一君に」と結びの言葉を残されました。

その後を受けてまして、古い写真やメモを依りどころとし、菅谷さん(S35年卒/BH)にも記憶を手繰り寄せていただき、思い出せる限りの話をして大江純子(旧姓佐藤・S37年卒/GH)に小史としてまとめさせました。

当時、明治大学生の間で幾つかのバンドがあり、各々、米軍の将校クラブとかジャズ喫茶とか東京湾納涼船等の仕事をしていました。

つはメランコリー・キヤッツの島田さん、安藤さん、稲垣さん達であり、今一つは、通学が総武線だったという共通点で出来た、西野さん(スチール・ギター)、森沢弘さん(ギター)、堀越さん(ベース)、菅谷さん(ギター)、高村さん(ハイブウクレレ)という編成のハワイアンバンドでした。(この当時のバ

ンド名は「高村精二とマウイスターズ」)

二つのバンドはアルバイト先で多くの接点を持ち、一種の仲間であった訳です。

ある日、菅谷さんが田村さん、島田さんから声を掛けられ、自分達が作りつつある明大軽音楽クラブに加入して一緒に活動してくれないかと誘われ、是非にと口説かれたのです。



賛同はしましたが、卒業の年になつてしまい、他のメンバーは就職も決まっていたので、父上の事業を継ぐ菅谷さんが、この事の為に一年間の留年を決意されたのです。

一方、高村さんが明高で同級生の藤井さんをベースマンとしてスカウトしてくれました。東島さんは一年生で入部しており、スチールギターは斎藤三男さんが演奏、原田純一さん、片岡敏一さん、大江文雄さん等人部し、クラブ員でバンドが形と

しては出来、それを菅谷さんが懸命に育てたのです。

当時は、パーティが大変盛んで、学内では、スポーツ関係から法曹研究会に至るまで、又一般社会でも色々な集りにバンドを呼ぶのが流行で、次から次へと絶える事がありませんでした。

卒業された西野、森沢、堀越、高村さんも、社会人一年生と同時に引く手あまたのバンドマンとして二足の草鞋を履いておりました。私たちはバンドボーイの替わりにバイト先へ付いて行き、練習して上手に歌えるようになればエキストラとして出願させてもらい、それが大変魅力で励みになり、毎日の練習は盛り上がりで行きました。

文連に加入出来ないまま、島田、安藤、稲垣、菅谷さんが卒業されてしまいました。

田村、藤井さんの新三年生は大きな責任を負われました。

ハワイアンでは、先述の森沢さんの弟で、二年生の時まで拓殖大学生とバンドを組んでいた、スチールギターが大変上手な森沢武さんを藤井さんが切望し、クラブに引き抜いて来ました。新学期の募集時に、二年生の長谷川さん、ギター名手の石田さん、甘いボーカルの今井さんが入部、すでに居た東島、大江さんの計七名で、軽音楽クラブ員のみによる実力あるバンドが出来上がりました。

「ワイキキドリマース」の誕生です。クラブの幹事長として藤井さんは、

自分のバンドの安定状態を礎とし、次々と新編される各バンドの勢いに力を得、文連の公認に立ち向かって行く事が出来たのです。

一つ二つの独走もあり小さな躍もありませんでしたが、熱意と努力がやつと実を結ぶ事になりました。一九六〇年秋の事です。

ガール・ハワイアン

大江純子(S37年卒/GH)

なるべく沢山のバンドが出来て活躍の実績が必要だった未公認の軽音楽クラブ(L.M.C.)の中で、ある日島田さんが、「どうだい、女の子もひとつバンドを作つてごらんよ」と話を始められ、その頃何とかギターのコードだけが弱く音を立てていた私達は、自信皆無でしたが、菅谷さん、安藤さん、稲垣さんにも励まされ、「上手くなつたつて良いんだ、一曲でも二曲でもやつてごらん、マスコットの存在でかまわないんだから」と乗せられた皆さんに手とり足とら教えていただき何とか二曲を演奏したのが、一九六〇年二月二十八日、「アミー」での事でした。その頃の事を思い返すと、何て楽しく青春したんでしようと思わずにはいられません。ベースの私はコード分解表を壁に貼り練習、ピアノの小島一絃、中岡健一さんが音の運び方を教えてくれ、稲垣さんは譜面を書いて下さり、血マメが破れれば島田さんが根性が

あとで待たせて下さり、皆さん本当に親切に盛り立て下さったのです。藤井さんは「勉強勉強」と言っていて、昼はタクシーや不二屋ミュージックサロンに連れて行って下さり、バックキー、大橋、大塚、ボスのステージを視、夜はバンドに付いて行って、休憩の間にギターを教わったり、ジルバを踊ったり……。「アミ」での演奏にスチールギターはどうしても無理で、斎藤三男さんが助けてくれました。

ブレイ後のコメントのよせ書きに、島田さん「これだけ出来るとは思わなかった、将来が楽しみだ。」、稲垣さん「最初としては上出来でした、しかし、ここでおごつてはいけません。たえず未だ到達出来ないものがあると思つて精進して下さい。」、メンバーでギターの小林恵美子「最初のステージの割には良く出来た。」、ギターの菊池宏子「手がブルブル、足がガタガタ、胸がドキドキ」、ウクレレの荻野谷(現・野上)美代子「大いに練習を積み、頑張ります。ウクレレの藤田(現・平見)芳江「靴下より強い女性の心臓。」等のコメントが残っております。私はあがつて何も憶えておりません。横で皆谷さんが正しいリズムでギターを弾いて助けて下さったおかげです。「期待以上の成果で大変うれしかった」と書いて下さっています。百パーセントお世辞ですが、とりあえずデビューしました。

驚く事には、早くも五月十五日和



後列左から 大江(旧姓佐藤)純子、ラジック(犬丸)俊子
前列左から (円城寺)静子、竹内、石垣陽子、(植田)茂子、
熊野糸娘、井上(旧姓阿部)久仁子

泉祭には「ワイキキ・ドリマーズ」と共にステージに上がっています。

森沢さんがスチール、かけの方で石田さんがギターを弾いて下さつて、姿が写真に残っています。Tシャツにマジックでやしの木を引いただけの粗末なユニフォームで「ホワイト・アンド・セピアーズ」と言うモダンな名前もこの頃付けたと思います。一九六〇年四月新入生阿部久仁子が入部し、ピアノが出来ましたので「それとスチールギターを」と、森沢さんの特訓を受けました。

十一月の八十周年祭には、ついに女の子だけのバンドで出演する事が出来ました。
一九六一年には阿部・私を除いた全員が卒業してしまつたのですが、スチールギターも段々腕が上がつて行き、新入生の熊野糸娘というボーカリストが入つて来ました。その素

早い歌唱力のおかげが本当に大きかったです。

八人編成のバンドになり、ハイとも出来るほどに成長しました。

一九六二年、今度は私だけが卒業し、引き継いだベースの笠原(現・鈴木)節子はピアノが出来ると仲々立派なもので、明大にガール・ハワイアンありという所に消ぎつきました。

OB、OG ハワイアンバンド

大江純子(S'37年卒/GH)

一九九五年二月、楽友会常任幹事に於きまして、「元来音楽のないOB会は無意味である。何らかの形でブレイする楽友会であつて欲しい」と言う若いOBの意志を受けて、OBバンドを作つて秋に演奏会を開きたいと言う企画が出されました。卒業と同時に楽器を奏する事を止めてしまつた人達が殆どと推察されますし、果して成り立つものかしらと案じつつハワイアンのOB、OGの事を考えました。

ロツクの侵略に依り一九七五年には我がハワイアンは存在しなくなつていきました。ずっと寂しい思いを抱いていました。全員八六名のOB、OGに先ず呼びかける便りを出しました。すでに鬼籍に入られた方、外国住まいの方、行方が分からない方を除いて、六五名でした。

思いも掛けない参加の返信を沢山

いただき、五月十四日に懇親会を藤井さんの会社のロビーで開く事になりました。

皆さん遠くは北海道や四国から、十四名が出席下さり、二つや三つのバンドが出来るのではないかと思う位盛り上がりました。又ブレイは出来ないが当日は聴きに行きたいとか次の日程には出席したいと言う方も一七名ほどおりました。



一編の楽器で入れ代わり立ち替わりのものでした。皆さん仲々のものでした。

今年ウクレレブームの兆しがあるそう、楽器店は品切れ中だとか又ハワイアン音楽が日本にリバイバルするかも知れません。

ジャズを愛した皆さんも目下斎藤秀信さんのお竹折りでまとまりつつあるようです。十月のOBバンドの演奏会が大変楽しみみです。